図工・美術におけるアクティブ・ラーニング構造の検証
～ワークショップの手法を用いて～

◎西村　徳行（東京学芸大学美術・書道講座美術科教育学分野）
〇嶽　里永子（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
石井　壽郎（東京学芸大学美術・書道講座美術分野）
太田　朋宏（東京学芸大学美術・書道講座美術分野）
鉄矢　悦朗（東京学芸大学美術・書道講座美術分野）
大櫃　重剛（東京学芸大学附属世田谷小学校）
栗原　正治（東京学芸大学附属世田谷小学校）
守屋　　建（東京学芸大学附属小金井小学校）
水戸野寛子（東京学芸大学附属大泉小学校）
桐山　卓也（東京学芸大学附属竹早小学校）
露崎　由海（東京学芸大学附属竹早小学校）
栗田　　勉（東京学芸大学附属世田谷小学校）
大根田友萌（東京学芸大学附属小金井中学校）
山田　　猛（東京学芸大学附属竹早中学校）
神田　春菜（東京学芸大学附属高等学校）
後藤　保紀（中野区立西中野小学校）
代表者連絡先：nishimur@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】アクティブ・ラーニング　図画工作科・美術科教育　ワークショップ　教員養成

１　はじめに

本研究は、小学校図画工作科を担当する教員や中学校・高等学校の美術科教員、またその職を目指そうとする学生の現状調査と指導力向上を目的としている。「アクティブ・ラーニング」に基づく能動的な学習者（児童・生徒）とその造形表現活動について、図画工作科及び美術科の視座からその関係を明らかにし、大学の授業、附属学校や公立学校の教育実習内容の充実を図り、真に主体的な教育実践に結びついた教員養成プログラムの開発を推進する。

本プロジェクトは、附属学校研究会図工・美術部会教員と大学教員、公立学校教員が連携して行ったものある。図工（Zuko）・美術（Bijyutsu）の頭文字をとり、通称“ZB”として研究活動を進めた。

２　本プロジェクトの目的

現代において、児童・生徒の自己決定場面を設定した造形表現活動は、児童・生徒、保護者、教師間において能動的な学びのスタイルとしての価値付けがなされている。反面、決まり事や順序が細かに設定されている制作行為、また他の活動で終わらない「作業」の教科振替などにみられる受動的な活動は依然として行われており、図画工作科・美術科の根本的な改善が必要である。

本学初等教育教員養成課程の学生の多くは卒業後、担任の教師として小学校に赴任し、初めて図画工作科の授業に携わることとなる。本研究は教育者が学習者の能動性を保証し、汎用的能力の育成を

図る「アクティブ・ラーニング」の理解にたち、その手法を軸とした図画工作科の教育構造の検証をもって、教員養成の長期的なあり方の再構築を図るものである。

本プロジェクトは、附属学校研究会図工・美術部会と大学、公立学校との連携によって検証を行うものである。国内の実践事例の調査、教員養成に携わるそれぞれの現状と実践事例を提示し共有するプレ・ワークショップの開催（１年目）と、学校教育関係者向けワークショップ型講座及び研究報告事例集（１年目および２年目）によって検証を深める。大学での指導、実習での指導、教育現場での指導が連動することで、持続可能な本学の教育に寄与するものと考える。また、他の教員養成系大学や自治体における小学校全科教諭の教科教育理解と指導力向上を目指す取り組みとして、図画工作科・美術科の教科性の評価と位置づけについても言及することとする。

３　本プロジェクトの実施

（１）アクティブ・ラーニングの事例調査および構造検証

○『アクティブ・ラーニングとは何か？』　～山田一美先生の講話による理解の共有～

日時：2015 年 8 月 17 日（月）　場所：東京学芸大学美術教育演習室　参加人数：15 名

講師：山田一美氏「日本における次世代対応型教育モデルの研究開発」プロジェクト統括教員（東京学芸大学・OECD・文部科学省・東京大学の連携による研究プロジェクト）、東京学芸大学教授、同附属竹早小学校校長（当時）

活動主旨：アクティブ・ラーニングとは何か？研究の道筋を見出すため講師を招き、講話を基にアクティブ・ラーニングのあり方を検討する

〈活動概要と様子〉

山田一美氏は､現在東京学芸大学で行われている OECD との共同の次世代教育モデル研究開発において主軸となって研究を推進しており、美術教育のみならず、現代の教育課題を社会モデルの変容を前提とした俯瞰視から捉えた上で、美術教育のこれからを、その本質を外さずに見定めている。その様な教育の変革の最前線にいる氏の話の内容は、我々に多大なる示唆を与えてくれた。附属学校のそれぞれの校種においても新しい学力観に打ち出された授業スタイルの変革と、これまでの授業で培われた指導方法などを統合して捉えなおし、協働的に研究を推進していかねばならないことが実感を伴ってきた。国際中等教育学校では国際バカロレアの教育モデルを軸に、竹早地区では幼小中連携カリキュラムからの主体的な学びの検証軸に、小金井小学校では構成主義の知見から子どもの新たな学力観の可視化を行為と解釈から深めるなど、各附属学校ではその校種により、それぞれの立場、学校研究を基に AL の研究を行う事に大きな価値があると思える。そしてそれらを摺り合わせていくことから、この附属学校研究部が考える AL 像を､ワークショップで明らかにしていくことに研究の成果が顕著化すると考えられる。ワークショップ開催の価値と、我々附属学校園として行うことの使命が明確になってきた。

（２）プレ・ワークショップの実施

日時：2015 年 10 月 31 日（土）　場所：附属小金井小学校図工室　参加人数：21 人

〈活動概要と様子〉

12 月に行われるワークショップに先駆けて、事前検討会（プレ・ワークショップ）を行った。参加者は大学教員、附属学校教員などプロジェクト関係者と学生であり、外部に向けてワークショップを実施する前に、ワークショップの内容を検討するという目的で行われた。当日行う予定の３つのワークショップを事前に行い検討することで、本プロジェクトが提案したいアクティブ・ラーニングの構

造を共有することができた。

（３）ワークショップの実施

１）現場から探り出すアクティブ・ラーニングの意義（１年目）

日時：2015 年 12 月 26 日（土）場所：東京学芸大学附属小金井小学校

〇ワークショップ A『自由にのびのびモノプリント』

活動場所：第一図工室　担当者：桐山卓也 栗田勉 神田春菜 西村徳行 後藤保紀

参加人数：20 名（WS 参加者 16 名、運営 4 名）

活動趣旨：プラ板と絵の具を使ったモノプリント。手軽に、何度でもやり直せて、自分のスタイル・技法を模索しやすい題材である。この活動の中から、アクティブ・ラーニングについて考えてもらうワークショップである。

〇ワークショップ B『題材工房～「みる」から「つくる」を考える～』

活動場所：第二図工室　担当者：大根田友萌 嶽里永子 水戸野寛子 守屋建 石井壽郎 大櫃重剛　参加人数：21 名（WS 参加者 15 名、本学教員 1 名、運営 5 名）

活動趣旨：アクティブ・ラーニングを意識した題材提案を行う。活動はグループごとで話し合い、全体への提案、報告発表を行う。参加教員がそれぞれの立場で自身の考えや想い、悩みを述べ、教育現場の実態を共有する。そこから現場教員の共通の視点やキーワードを導き出すことに本活動のねらいがある。

〇ワークショップ C『音・動・色・形による交響曲』

活動場所：体育館　担当者：山田猛 露崎由海 渡辺行野（附属竹早中学校音楽科）

参加人数：29 名（WS 参加者 16 名、運営 3 名、学生スタッフ 10 名）

活動趣旨：音と身体による表現が、色や形につながりシンフォニーとなっていく、共同制作によるワークショップ。①「身体を解放することで自由な表現が生まれる」ということを具現化し、音楽や身体表現、そして美術の色や形での表現に通底する、表現の本質に迫ることの体感を目指している。②小学校低学年対象を前提とした、たたき台としての提案であり、受講者が体験後、修正点やアレンジ案などをグループ別に議論し、最後に全体で共有する。

〇全体会・研究報告会

活動場所：食堂・体育館　担当者：（代表挨拶）西村徳行（各ワークショップの紹介）桐山卓也 大根田友萌 山田猛（司会）嶽里永子

参加人数：78 名（WS 参加者 47 名、本学教員 2 名、運営 16 名、学生スタッフ 13 名）

◎まとめ：今回はアクティブ・ラーニングのあり方を「現場から探り出す」ことを主たる目的とし、３つのワークショップと全体会・報告会を企画した。現場で日々大切にしてきた児童・生徒の姿から「アクティブ・ラーニング」のあり方を再考するよい機会となった。一方、能動的に表現する児童・生徒の姿が様々に明らかになるなかで、それが生まれる構造や条件、また何をもって学習が成立したかという検証については、次年度への課題となった。

２）現場から探り出す学びの「本質」（２年目）

日時：2016 年 12 月 26 日（月）場所：東京学芸大学附属小金井小学校

〇ワークショップ A『PAPER PAPER』

担当者：石井壽郎　水戸野寛子

活動趣旨：「紙で何を作るか」よりも「紙を使って何を得られるか」を考えるワークショップ。結果としての作品よりも、制作の過程に重点を置き、完成後に制作過程の思考の動きを改めて意識すること

で、本活動のキーワードがどのようであったかを再考することとした。
キーワード：対話的学び、思考力・判断力・表現力
○ワークショップＢ『つくることはすき？』
担当者：後藤保紀　桐山卓也　神田春菜
活動趣旨：本ワークショップでは粘土を用いて、感性を働かせている状況を振り返ることから「学び」を概観した。さらにその学びが「なぜ主体的となったのか」について参加者のアートプロセスジャーナルから読み解き、「学びに向かう力はどのように形成されたか」を考察した。
キーワード：主体的な学び、学びに向かう力
○ワークショップＣ『Earth, Wind & Higher』
担当者：大櫃重剛 栗田勉
活動趣旨：音楽や照明による空間演出が造形活動に与える心的効果や新たな気付きを促す活動規模のあり方（個別→班別→集団パフォーマンスによる協働的探究）を通して、素材感やグルーヴ感が造形活動にもたらす豊かな美的体験を考え、またその指導方法について省察する。
キーワード：主体的な学び、人間性の涵養
○ワークショップＤ『間違いづくり』
担当者：西村徳行 守屋建
活動趣旨：身近な場所に何らかの手を加え「間違い」をつくる活動。鑑賞の場面では、どのような手立てを用いて「間違い」へと変化させたのか、「造形的な見方」で考察するよう促した。活動を通して図画工作科・美術科の「学びの本質」に触れ、表すことの意味について再考した。
キーワード：深い学び、知識・技能の習得
○ワークショップＥ『感度を上げる：観る聴く感じる』
担当者：渡辺行野　山田猛　露崎由海
活動趣旨：本ワークショップの目指す「学びの本質」に迫るため、情報量の多い視覚を制限することで、聴覚、触覚、嗅覚に集中し、それらの感度を高めることで、普段気がつかない生活世界の香り、肌触り等に気づき、五感で受けとめるための開かれた鑑賞のためのチャンネルの獲得を目指す。
キーワード：深い学び、学びに向かう力
◎まとめ：本年度のワークショップでは、新しい教育課程のキーワードを基に造形活動を設定し、そこからあらためて図画工作科・美術科教育の「学びの本質」を探究することとした。キーワードが共通するワークショップを比較・検討するなど、それぞれの造形活動を多角的に視点で再考することができた。

４　成果と課題

二年間に及ぶプログラムの過程では新しい学習指導要領が告示され、本研究のキーワードとなる「アクティブ・ラーニング」についても、その具体的な視点が「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」として示されるなど、大きな変化があった。その中で、本研究は図画工作科・美術科における「アクティブ・ラーニング」を検討するとともに、教科そのもののあり方を附属教員だけでなく、大学教員、また参加いただいた多くの先生方と検討できたことは何よりも大きな成果といえる。今後はワークショップを通して抽出された様々な視点を、資質・能力等を基に整理・検討するなどして、図画工作科・美術科教育における学びの構造を明らかにし、教員養成プログラムの開発へとつなげていきたいと考える。